市川のまち 地名の由来

《No.10》

河原・妙典

妙なる経典、篠田家領河原の分かれ

「河原」とは、旧江戸川が形成した河川敷のことで、昔はかなり広い範囲を占めていました。この地域を領有したのが篠田雅楽助（うたのすけ）清久で、清久は千葉氏の配下として永禄七年（一五六四）の国府台合戦に参加、北条氏康に味方して戦功を立てました。その恩賞として与えられたのが、この「河原」の地域だったのです。

清久は、ここに館を構えて地域の開発にあたりました。この篠田館は、現在の妙好寺を含めた地域で、その中には持仏堂を置き、八幡社を鎮座しました。この八幡社は、現在でも妙典の鎮守として祀（まつ）られています。

清久の子宗久のときになると、豊臣秀吉の関東征伐によって、北条氏は滅亡、関東の地域は徳川氏が治めることになり、宗久は館を取り壊して徳川氏に従うことにしました。取り壊した館の跡には、父清久の念願であった、祖先の霊と主家にあたる千葉、北条一族の慰霊のための寺院を建立しました。この寺が日蓮宗の妙栄山妙好寺です。開山として迎えられたのは、中山法華経寺の十一世日典上人の弟子日宣法師でした。

「妙典」が「河原」から分かれたのは、この妙好寺が建立されて以後のことになります。即ち、妙好寺は日蓮宗の寺院であり、日蓮聖人が「南無妙法蓮華経」と唱えたように、法華経は妙なる経典であるというところから生まれたのが、この「妙典」の地名なのです。

江戸時代の書物にも「妙典とは法華経をいふ也。妙は妙法也。典は爾雅経也。当村の名は尊き名也」と記されています。

篠田宗久は、寛永二年（一六二五）に世を去りましたが、あとを継いだ宗清は、幕府から五カ年間、諸役免除の恩典を受けて塩田開発の事業にあたりました。宗清は次郎左衛門といい、僧籍に身を置いたものとも思われますが、慶安二年（一六四九）に亡くなっています。

妙典は、この篠田家を中心とした塩田開発によって発展したまちでしたが、この妙典には、宮本武蔵が五兵衛という人の家に泊まり、その折り、病にかかって亡くなったため、塚を築いて葬ったという話も残されています。

（写真は妙栄山妙好寺。ここには、篠田宗久を始めとする篠田家代々の墓も……）

（社会教育指導員・綿貫喜郎）

◇

次回は「国分」を予定しています。